

真宗における葬送儀礼の形成

——蓮如の場合——

真野俊和

はじめに

- 一 蓮如の葬送
- 二 葬送儀礼の形成
- 三 葬儀の執行者
- むすび

論文要旨

本稿でとりあげたのは、本願寺中興の祖であり、本願寺教団の組織者でもあった蓮如の葬送の儀礼と行事とである。とはいゝ筆者が目指すのは、たんに蓮如個人の葬送の実際を復元することにとどまらない。大衆を組織化する方向で仏教のあらたな道を指示した鎌倉新仏教系諸教団は、必然的に膨大な数の信者たちの死にかかわらざるをえなくなつた。まして教理のなかに死を本質的な契機としてふくむ真宗にとって、問題はより切実であつただろう。淨土への往生という幻想でなく、現実におとずれる死にたいしてかれらはどのような答を用意しようとしたのであるうか。こうした問題意識から出発した筆者は、蓮如の葬送の次第をとおして、つぎのような事実を確認した。

- 三 葬儀にあたつては御堂衆とよばれるカテゴリーの僧侶たちが大きな役割をなつていく様相がみてとれる。
- 二 教団の指導者の死にあたつて多くの奇瑞譚が生成されるが、それはしばしば遺骨に関するものである。信者が蓮如の遺骨を争うように求めていた事實を想起するとき、これは興味深い事実である。しかしこれについては触れることができなかつた。
- 四 蓮如は自分自身の葬儀についておおくの指示を遺していたが、それにもかかわらず実際の葬儀はおおくの部分で世俗の慣行にしたがつていた。葬送儀礼と教団の関係を今後追求していく必要がある。